

## 親鸞聖人の『華嚴経』観

永原 知行

親鸞にとって、真実の教は、「それ真実の教を顕さば、すなはち『大無量寿経』これなり。」と『大経』である。正依の經典は浄土三部経であるが、三部経の他に『華嚴経』と『涅槃経』をはじめ多くの経論釈をもちいてその思想を補完して論じている。『教行信証』を中心にその『華嚴経』観を見てみる。

親鸞は、『華嚴経』の一道を以て本願の一実の大道としている。『涅槃経』の実諦を誓願一仏乗として、『華嚴経』の信心は『涅槃経』の仏性であり、本願の信樂とした。性功德は、『華嚴経』「宝王如来性起品」を受けている。性起は、仏性現起である。成仏の法は本願一乗であって、本願一法のみが衆生を大菩提に運載する唯一無二の法としている。一乗海については「行巻」にある。一乗を得るは、阿耨多羅三藐三菩提を得ることである。一乗法は究竟の仏果を所至とする。弘願法の所至は第十一願の滅度である。御自釈は「一乗要決」とほぼ同じである。親鸞は第一・二を無視して、第三をとっている。海について本願力の力用である。『論註』に海一味の原型がある。本願一乗海は、凡聖・逆謗闡提・無明を転ずる。阿闍世のような逆謗闡提が転じて恒沙の万徳となる。恒沙の無明が転じて智慧となる。罪悪は人間の根元的なものである。罪を消さず、悪を廃して徳とするのである。凡聖の善も逆謗闡提の悪も本願海に入れば同一鹹味となる。不宿屍骸とあるように浄土には声聞縁覚はなく、現生において本願海には二乗自力は宿さない。

信樂積の『華嚴経』「入法界品」は、普賢菩薩が説いた結びの文である。『華嚴経』の結びは仏道の始まりである。普賢自在の法を聞いて信心をおこし、信心歡喜して、速やかに無上道に至る。

真門釈で善知識の重要性を弥勒が善財童子に語っている。

『涅槃経』と『華嚴経』の連引について、成道の『華嚴経』から涅槃の『涅槃経』というのが順である。そこを親鸞は涅槃から成道の順としている。連引の意図は、『涅槃経』は往相の証果であり、『華嚴経』は還相の普賢行を示すこと、従果向因によること、『涅槃経』に釈尊一代に帰することである。

『華嚴経』の普賢の行徳は還相回向である。すべてのものを救わずにはおれない大悲の心である。弥陀の慈悲の極まりである。浄土に往生した念仏者は大悲の心に促されて、生死の世界に戻り、普賢菩薩のように自在の救済活動をするのである。

如来回向の信心は智慧と慈悲の徳をもつ仏因だから、信心の行者は如来と等しい。等しいは、ちかい、ほとんど同じという意味で、仏のさとおりである正覚とほとんど同じ徳をもつ菩薩の最高位をあらわす等覚である。念仏の行者が弥勒と同じく次生で必ず成仏する身に定まるとの現生正定聚をいうのである。

親鸞は、等同を明らかに区別している。等正覚の解釈を、魏訳の『大経』の仏の十号の等正覚と、『如来会』の等正覚と取る。『如来会』の等正覚は、信心を獲得した者が正定聚に住して、等正覚の位にいたのである。等正覚を、仏の十号の等正覚とすると、信心を獲得した者が仏果を得ることになり、信一念の時に正定

聚に住することに反する。

因位としての菩薩位には同じを用いて、果位の仏には等しいのみを用いている。信心の人は因位にある者である。菩薩の位であり、同じと表現している。

親鸞は、『華嚴経』に浄土教要素を見ているのである。

### 親鸞浄土教における光の形而上学的意義

安藤 章仁

あらゆる宗教において光の持つ意味は大きい。親鸞においては、光が親鸞浄土教を成立させる存在論的意味を持ち、しかも多様な理解が示されるところに特徴がある。特に晩年七十代から光に対する関心は顕著に深まっていく。

親鸞の光に関する用語例を調べると、大別して六つの理解があることがわかる。一つは、光としての仏身仏土である。阿弥陀の言語や「浄土三部経」に導かれながら親鸞は、漢語和語の自著の中で光としての仏身仏土論を展開している。二つには、『弥陀如来名号徳』の清浄、歡喜、智慧光の解説にみられる法蔵菩薩の菩薩行に成立根拠をもつ光である。この三光への注視は、玄一『無量寿経記』や憬興『述文讚』といった新羅浄土教典籍から源信、法然に伝承される日本浄土教を受けるものであり、光の成立を法蔵因位に求める親鸞オリジナルの理論的根拠は『一念多念文意』の二種法身論に示されている。三つめは光の本質を智慧とし、また慈悲のはたらきとみることである。光としての智慧は、救済の根拠であり、仏名の根拠ともなるので、親鸞浄土教においては大切な理解である。また、光、智慧、慈

悲を有機的な無限のはたらきとして捉えるのも親鸞の光に関する大乘仏教的理解である。四つめは、はたらきとしての光である。ここでは、浄土教の伝統に基づき無明の闇を破す救済のはたらきとして光が捉えられている。特に心光は、親鸞浄土教において実存の深みを照らすとともに救いの現生性に関わる点で重要である。また、光号因縁では親鸞浄土教における仏道成立の契機として光明が取り上げられている。救済としてはたきただけではなく、仏道成立の要因とするところに親鸞における多様な光のはたらきを見ることができるところに親鸞における香光莊嚴の語にみる感官に展開する光である。これらの用語は、嚴密に經典に基づくもので、受け手の感覚的クオリアではない。「信文類」にも触光柔軟の願が引用され、真仏弟子の在り方を規定しているが、感官に関わる光の表現は、実体化されるものではなく「衆生ヲ仏道ニイラシムル」(『浄土和讃』)はたらきとしてみるべきである。六つめは、広略相入にみる光である。ここでは親鸞浄土教における光の成立根拠が示されるとともに、限定されることのない光の原意が明らかにされている。

親鸞浄土教における光の問題で特徴的なことは、親鸞が光を色、形、言葉などで具象的に表現していることである。上下の賛銘が親鸞自筆の専修寺本「紺地十字名号」「黄地十字名号」、妙源寺本「光明本尊」の中幅には、それぞれ控えめに細い波状、地色そのものを光と見立てる、広中の波状といった三様の光が具象化されている。ここでは光は、画一化されずに仄かに形象化されている。さらに親鸞は、言葉として「歸命盡十方无碍光如来」「南无不可思議光如来」「南无不可思議光佛」といっ